

教育方針の確立

1

大正十四（一九二五）年四月。その時はある意味、安城女子職業学校にとって大きな転機となった。寄宿生は大正十三（一九二四）年ごろには、主に県内からの五十名ぐらいであった。それが、県外からの大量入寮生を迎えて百数十名となり、寄宿舎も新たに必要となった。

これまでは、校内の第一寄宿舎で約五十名が収容可能だったが、加えて二階建校舎の二教室を開放し、また安城町内に点在する借家（寮）、教員の榊原宅でも寄宿舎として応急に収容した。

そしてやがて、校地脇に約九十坪（約二百九十七平方メートル）の小学校の古校舎が移築されたのを借用した。まずはまとまった理想的な寄宿舎として利用された。

舎生たちは、ここで共同の生活を始めた。食事も自炊で、夏冬を問わず、朝は四時から炊事にかかり、夕は七時まで跡片付けと翌日の用意を交替でした。

「その働きぶりは実に立派なもので、よそでは見られぬ立派さでした。朝夕の掃除などには、一同うしろ鉢巻のかいがいしさ。床などはいつもピカピカに光っていました」

だいは、舎生たちの自律した生活ぶりに目を細めたのだが、こうした精神修養と礼儀作法を第一

旨とした。清潔さも強調した。風紀問題について厳しく、とくに服装の乱れや言葉使いはこまかく注意したのだった。

2

「十里の旅の第一歩
百里の旅の第一歩



大正12年に建設された寄宿舎（舎監室および7室あり、生徒約50名が寄宿していた）

として生活を送ることを推進するのも、夫・三蔵の力にあることを認めるのだった。

「これはまったく理事長が軍人生活の根本義をそのまま取り入れ、自ら先頭に立って生徒訓育に当たった賜物でした」

舎監は校主の三蔵が担任した。

三蔵は、大正十三（一九二四）年二月、財団法人安城女子職業学校の認可を受けたことにより理事長にもなって、会計などにも携わっていた。舎監はその一任務としていた。

三蔵は海軍仕込みの徹底した指導を行った。何事も最後までやり通す実践力を重んじ、生活時間の合理化、質素節約を

同じ一歩でも覚悟が違う

三笠山に登る第一歩

富士山に登る第一歩

同じ一歩でも覚悟が違う

どこまで行く積もりか？

どこまで登る積もりか？

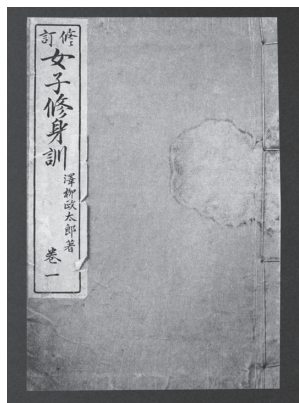
目標がその日その日を支配する」

教室内で寺部三蔵が一句一句を囁みしめるように朗唱していた。

「これは、いつもよく紹介する後藤静香ごとうせいこうさんの詩で、『第一歩』という題のものです。私たちは、事に当たるにもしっかりとした目標を持って覚悟してかからねばなりません」

解説を加える三蔵は学科では修身科を担当していた。

後藤静香は社会教育家、社会運動家として修養団体・希望社を主宰し、『希望』『のぞみ』『光の声』などいくつかの啓発的な内容の修養雑誌を発行した。これらの雑誌には、格言や偉人の伝記、寓話などをわかりやすく解説し、男女とも修養して、よりよい人間、社会に有益な人間にならねばなら



大正時代の修身教科書（女性の能力開発について新しい思想が見える）

ないと説いた。代表作とされる詩集・格言集『権威』の発行は百万部にも及んだといわれ、全国の青少年をはじめ教育者や労働者にも愛読された。現代においても、長嶋茂雄や松坂大輔など彼の残した格言を愛する人は多いと言われるが、三蔵もまた、この後藤の思想に共感し、修身科の授業にもその言葉をよく引用して指導していた。

「この『女子修身訓』は、教育行政に手腕を発揮され、京都帝大総長にもなられた沢柳政太郎先生が、新しい自由主義教育運動を唱えられて著されたものですが、能力の開発についてこう書かれています」

三蔵は、居並ぶ生徒たちに鋭く視線を流しながら、修身の教科書を取り上げた。

3

「我等は際限なく発達し得べき智徳の種子を具う。而してこれが発達は、父母師長の教導によることと多けれども、また我等自身の決心勉強によること大なり。我等は自ら勉めて『学ヲ修メ業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就』せざるべからず——」



修身科を担当した寺部三蔵理事長

読み上げた三蔵は、生徒の反応をうかがうようにちよつと間をおいた。

「よろしいですか。皆さんは自分の持てる能力を無限に伸ばしていける可能性を秘めているんです。しかも、大事なことは、その可能性を実現するのは、自分の意志と努力によつて達成されるということです。目標も、いったん覚悟をもつて立てたなら、意志と努力で実現していかなければなりません」

三蔵の熱を帯びた説得に、生徒たちも姿勢を正して、三蔵の顔を食い入るように見つめるのだった。

—学校は学習の場であるとともに、自己を高める修練の場として考える—それは、寺部夫妻共通の思いだった。

「私は学校を楽しんで勉強する所とするよりも、むしろ苦しみの道場としたいのです。そして、そんな苦しみにも崩折くずおれない、ほんとうに強い、しっかりした主婦を作りたいのです」

だいたい、かの『主婦之友』の記事の中でこう言い切った。

「教育とは、一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発することです」

人間の潜在能力の無限の可能性を信じた上での教育の役割を、だいはのちにこのように明言することになった。

女性の地位の向上を立学の趣旨として創られた安城裁縫女学校は、その発祥からしだいに変貌へんぼうし

成長した。安城女子職業学校の教育は、「庶民性」と「先見性」を建学の理念、そしてだいが若き苦難の時代に体得した「真心・努力・奉仕・感謝」の四つの精神を実践していくことを教育の根幹に据えて、「建学の精神」を構築するようになっていった。

4

安城女子職業学校の当初の教育は、よき家庭の主婦、また職業婦人（教師）として立つために十分な裁縫技術の指導をすることが中心であったが、やがてはつきりと、いわゆる全人教育が意識的に行われるようになった。

「女人ノ天職ヲ徹底的ニ自覚セシメ、時代ノ要求セル實際的実用的、所謂社会的女子ヲ養成スル家族的女学校ニシテ、軽佻浮薄ナル女子ヲ養成スル形式教育ハ絶対ニ忌避致シテ居リマス」

「学資ヲ節約シ質素勤勉自立自活ヲ旨トシ、其他生活上實際事項ヲ事実ニ鍛錬シ、人格教育ノ基ニ忠実ナル人ヲ養成スルヲ主義トシ念願トシ……」

「入学案内」には教育主旨や特長がこう掲げられるようになった。

三蔵は学校における修養をさらに徹底、修養団とも深いかわりを持った。

修養団は明治三十九（一九〇六）年に結成された精神運動作興のための修養団体である。スローガンに「流汗鍛錬・同胞相愛」を掲げて、自らの修養と他への博愛を目指し、後藤静香もこの団体



学校内で行われた修養会（昭和5年頃）

活動に傾倒したりした。

三蔵もまた、この修養団の精神に深く感ずるところがあり、積極的に修養精神の普及に力を注ぐようになった。この修養団の精神は「真心・努力・奉仕・感謝」の精神と深く結びつくものがあり、学校での生徒指導に大きく位置づけられていくことになった。

修養団活動が、生徒指導の中に独自に組み込まれるようになり、毎日朝礼時には、修養団関係者・小林一郎が著わした修養書『心の力』を一章ずつ全員で唱和してから授業に入ったりして、修養団の精神が生徒指導の根幹になっていった。

だが、この修養団との密接な結びつきが、やがて図らずも学校経営にも大きなプラスをもたらすことになった。

その支部長となったのは「農民道」を唱え農村教育の先覚者と目されていた山崎延吉やまざきのひさきちであった。山崎は修養団の趣旨に賛同し、支部長となってその精神の発揚に努めていた。その山崎が、修養団と三蔵の深いかわりを機縁として、だいが描く「次なる飛躍」の舞台において、主役の一人として登場することになるのだった…。